

## 僧侶の恋歌（2） 勅撰集編（中）

— 八代集（『後拾遺集』）『詞花集』 所収歌の表現分析 —

前田雅之\*

はじめに—個人名をもった和歌と表現の非個性—

本稿からは、前稿で予告していたように、勅撰集に入集した僧侶の恋歌の表現性に注目して議論していく。というのも、表現に着目することによって、読み手の属性（この場合は僧侶）と和歌の表現が関係するかどうか明らかになると思われたからである。つまり、僧侶の詠む恋歌は僧侶なる属性が表現上どこかに反映しているかどうかということだ。さらに、そこから、逆に、属性と表現の関係性によって和歌なるものの特性が浮かび上がってもくるだろう。関係性があれば属性による固有の表現をもつのが和歌というものになり、他方、関係性が認められなければ、属性と無関係な、ある意味で普遍的ともいえる詠みぶりが和歌というものになるだろう。

だが、この詳細は以後展開される具体的分析に譲らなければならぬ。いけれども、あっさりと結論めいたことを前もってここで断言してしまうと、どうやら時代の差異や歌壇の流行を含んだ傾向ほど僧侶という属性は表現に影響を与えていなかったようだ。これをやや野卑に言い切れば、僧侶が詠もうが、女房が詠もうが、さらにまた、武士・武家が詠もうが、ほとんど表現レベルで変わらないのが和歌である、ということだ。言い換えれば、和歌とは属性・性別・身分（ジェンダー）とは無関係に共通の表現・言説様式をもって自立している存在であるということでもある。

とすれば、なおさらのこと、当初の目論みからは大いに外れながらも、そこから改めて、和歌に関する本質的な問題が迫り出してくるはずである。それは、勅撰集において作者不明の「よみ人知らず」歌がそれなりの比重をもっていることは十二分に諒解しているけれども、それでも和歌とはなによりも人麿・貫之・定家とあるごとく固有の作者をもったテキスト、即ち、個人が名前を出して記すテキストだ、という昔から言い古されてきた問題である。

周知のように、「物語」と総括されるテキストは、『竹取物語』・『伊勢物語』・『源氏物語』から『宇治拾遺物語』・『平家物語』、果ては『秋夜長物語』・『きのふはけふの物語』に至るまで、原則的には、誰が書いたかが分からない、また、分からないように記すという叙述スタイルが半ば制度化あるいは伝統化していたが、少なくとも和歌はこの伝統の圈内にはいなかった。歌会・歌合・百首歌を見るまでもなく、勅撰集に入集したかどうかは歌人のグレイドを決定していたように、和歌こそ、固有の名という抽象があった言い方よりも、具体的な生を営む、まさに歴史的「現存在」たる個人が作者（詠者）として前面に登場する、個人を核とする文芸だったのである。

再度、断言すれば、個人なくして和歌および漢詩・連歌・俳諧といった前近代日本の韻文は存在し得なかったのだ。おそらく近世に至って（場合によっては近代の可能性もある）捏造された例が圧倒的に多数だと思われるが、西行ゆかりの地に掲げられている「伝西行歌」も（西行）という個人名故に捏造されたに違ひなからう。「よみ人しらず」の駄歌（むろん、誰かが詠んだものだが）が「西行」という個人名をもつことで秀歌になる。こんな力を個人名が付着した和歌にはあるのではないか。

こうした個人を核とする文芸のなかで、和歌には、個人名をもった作者が参加する歌会・歌合・百首歌において、主として同一題で詠まれる多様な和歌が織りなすという集合性を有し、他方、連歌・俳諧には、反撥を含み込みながらも個々人が付けていく句の連鎖によって一つの言語世界を作りあげているという和歌とは別次元の集合性を有しているけれども、個人名をもった複数の個人が歌会・連歌・句会といった事業に参加し、それぞれ和歌・連歌・俳諧を制作し、個人名が鏤められた、換言すれば、決して抽象の次元には踏み込まないが、集合性をもった壮大な言語世界⇨空間が構築されている点では見事なくらいに共通していよう。個人名なくして百首歌・歌合・褒貶和歌から連歌、和漢聯句、俳諧（連句）に至る、日本の正統的（⇨雅的）な韻文文芸は生み出されなかったのである。

ここでの主題である「僧侶の恋歌」も、僧侶誰々という属性（僧官僧位を含む）と名（通常は法名）をもった個人が詠んだ恋歌だから、問題として俎上にのぼせることが可能となったと言っただけ。とはいえ、もう一度属性なるものが全く和歌の表現には響いてこないのかどうかも具体的に検討しておく必要があるだろう。その場合、稚児に対する思いを

開陳した実情歌だけではなく、詠者を単なる記号と化し、まだ若い詠者が老いの歌を詠むように、あらゆる役割を演ずることを可能とする「題詠」なる和歌詠作システムにおいても見なければならぬことは贅言を要しない。

そこで、本稿は、前稿にあげた三区（八代集・十三代集前期）『新勅撰集』⇨『風雅集』・十三代集後期（『新千載集』⇨『新統古今集』）のうち、八代集を①（僧侶の恋歌が本格化する『後拾遺集』⇨『詞花集』）と②（『千載集』⇨『新古今集』）に細分化し、①の分析を課題とする。

## 二、『後拾遺集』⇨『詞花集』の僧侶の恋歌の全容

前稿で既述したように、僧侶の恋歌が本格化するのには、『後拾遺集』からであり、題詠は『金葉集』からであった。<sup>(4)</sup>よって、八代集の関する考察も、白河院が勅撰した『後拾遺集』（一五首）から始め、『金葉集』（五首）・『詞花集』（十一首）の計三十一首とする。まずは、勅撰三集の全容を一覧したい。

### 『後拾遺集』

はじめたる人につかはしける

叡覚法師 605

このはちる山のしたみづうづもれてながれもやらぬものをこそおもへ

題不知

能因法師

624

こほりとも人のこころをおもはばやけきたつはるのかぜにとくべく

かへりごとせぬ人のごとひとにはやるとききて

道命法師 626

しほたるるわがみのかたはつれなくてことうらにこそけぶりたちけれ

かへりごとせぬ人に山でらにまかりてつかはしける

道命法師 627

おもひわびきのふ山べにいりしかどふみぬみちはゆかれざりけり

題不知

道命法師 633

あふことはさもこそひとめかたからめこころばかりはとけてみえなむ

題不知

永源法師 674

あひみてののちこそそこひはまさりけれつれなき人をいまはうらみじ

あひそめてまたもあひはべらざりけるをむなにつかはしける

叡覚法師 718

あきかぜになびきながらもくずのはのうらめしくのみなどかみゆらん

たのめけるわらはのひさしうみえはべらざりければよみはべりける

律師慶意 733

たのめしをまつにひごろのすぎぬればたまのをよわみたえぬべきかな

おもひけるわらはの三井寺にまかりてひさしくおともしはべらざりければよみ侍ける

僧都遍教 741

あふさかのせきのしみづやにごるらんいりにしひとのかげのみえぬは

題不知 権僧正静円 762

あふことのだだひたぶるのゆめならばおなじまくらにまたもねなまし

題不知 増基法師 768

たなばたをもどかしとみしわがみしもはてはあひみぬためしにぞなる

としごろあはぬ人にあひてのちにつかはしける

道命法師 772

あひみしをうれしきこととおもひしはかへりてのちのなげきなりけり

題不知 道命法師 785

夜な夜なはめのみさめつつおもひやるこころやゆきておどろかすらん

題不知 能因法師 798

ねやちかいむめのにほひにあさなあさなあやしくこひのまさるころ

かな

『金葉集』

従二位藤原親子家草子合に恋の心をよめる

宣源法師 356

いまはただねられぬいをぞとするとするこひしき人のゆかりとおもへば

恋の心を人人のよみけるによめる 律師実源 403

いのちをしかけて契りしなかなればたゆるはしぬる心ちこそすれ

はじめたる恋の心をよめる 良暹法師 421

かすめてはおもふころをしるやとてはるのそらにもまかせつるかな

多聞といへるわらはをよびにつかはしけるに見えざりければ、

月のあかりけるよよめる 権僧正永縁 453<sup>5)</sup>

まつ人のおほぞらわたる月ならばぬるたもとにかけは見てまし

物へまかりけるみちにはしたもののあひたりけるをとせ侍

りければ、上東門院に侍りけるすまひこそとん申すといひ

けるをよめる 源縁法師 464

名きくよりかねてもうつるころかないかにしてかはあふべかるらん

『詞花集』

題不知 隆恵法師 189

かくとだにいはではかなくこひしなばやがてしらぬ身とやなりなん

題不知 覚念法師 197

こひしなばきみはあはれといはずともなかなかよその人やしのばむ

題不知 浄蔵法師 200

わがためにつらき人をばおきながらなにのつみなきよをやうらみむ

題不知 能因法師 205

ころさへむすぶのかみやつくりけむとくるけしきもみえぬきみかな

春になりてあはむとたのめたる女の、さもあるまじげにみえ

ければいひつかはしける 道命法師 215

やまざくらつひにさくべきものならば人の心をつくさざらなむ<sup>6)</sup>

恋の歌とてよめる 隆縁法師 209

身のほどをおもひしりぬることのみやつれなき人のなさけなるらん

題不知 道命法師 222

つらさをばきみにならひてしりぬるをうれしきことをたれにとはまし

冬のころ、くれにあはむといひたるをんなに、くらしかねて

いひつかはしける 道命法師 231

ほどもなくくるとおもひし冬の日のころもとなきをりもありけり

題不知 恵慶法師 244

あふことはまばらにあめるいよすだれいよいわれをわびさするかな

弟子なりけるわらはの、おやに具して人のくにへあからさま

にとてまかりけるが、ひさしくみえ侍りざりければ、たより

につけていひつかはしける 最厳法師 253

みかりののしばしのこひはさもあらばあれそりはてぬるかやかたを  
のたか

いとほしく侍りつるわらはの、大僧正行尊がもとへまかりに  
ければいひつかはしける  
律師仁祐 259

うぐひすはこづたふはなのえだにてもたにのふるすをおもひわするな

かへし、わらはにかはりて  
大僧正行尊 260

うぐひすは花のみやこもたびなればたにのふるすをわすれやはする

『後拾遺集』・『金葉集』・『詞花集』該当歌のうち、種別によって分類  
すると、

(A) 異性に対する実情歌・道命(後拾遺 626・627・772・詞花 231)・  
覺(後拾遺 605・718)・源縁(金葉 464)

(B) 同性(≡稚児)に対する実情歌・慶意(後拾遺 733)・遍救(後  
拾遺 741)・永縁(金葉 453)・最敵(詞花 253)・仁祐(詞花 259)・行尊  
(詞花 260)

(C) 題詠・宣源(金葉 356)・実源(金葉 403)・良暹(金葉 421)、隆縁  
(詞花 209)

(D) 不明(題不知)のもの・能因(後拾遺 624・798)・道命(後拾遺  
633・785)・永源(後拾遺 674)・静円(後拾遺 762)・増基(後拾遺 768)、

隆恵(詞花 189)・覚念(詞花 197)・浄蔵(詞花 200)・能因(詞花  
205)・隆縁(詞花 209)・道命(詞花 222)・恵慶(詞花 244)

となる。

ここでは、問題を明確にするために、(D)「題不知」は考察から外し  
て、(A)・(B)・(C)について分析していく。

### 三、異性間実情歌の表現分析

(A) 異性間の実情歌から入りたい。具体的には、道命詠(後拾遺  
627・詞花 215・231)・観覚詠(後拾遺 718)の四首を分析する。<sup>(7)</sup>

まずは、「かへりごとせぬ人に山でらにまかりてつかはしける」とい  
う詞書をもつ道命 627 番歌である。<sup>(8)</sup>

おもひわびきのふ山べにいりしかどふみみぬみちはゆかれざりけり

道命詠の主たる技法は、「ふみみぬみち」における「ふみ」(文・踏み)  
の掛詞であろう。新大系本(久保田淳・平田喜信校注)が参考歌として  
挙げる『後撰集』雑一・よみ人しらず(1222)詠

おほぞらに行きかふ鳥の雲ちをぞ人のふみみぬ物といふなる

は、詞書として「女のもとにふみつかはしけるを、返事もせずして、の  
ちのちはふみを見もせでとりなむおくと、人のつげければ」とあるので、  
道命がこれを参考にした可能性は高い。但し、1222 番歌が「鳥の雲ち」を  
「人の踏み見ぬ」とするのに対して、道命詠は「山べ」の「ふみみぬみ  
ち」の差異がある。そこで、山と「ふみみぬ」でみておくと、藤原為時  
の息惟規には、

いひそめてただにはやまじたかやまの人のふみみぬしげりなりとも  
『惟規集』24)

がある。これも「たびたびかへり事せねば」と詞書にあるから、同一状況と言つてよい。ここでは、「たかやまの人のふみみぬ」「しげり（茂り）であるとしているが、同工と見てよいだろう。そして、「長曆・長久（一〇三七〜一〇四四）頃」（『新編国歌大観』解題）に詠まれた源頼実（？）寛徳元（一〇四四）の私家集『故侍中左金吾家集』（100）につくと、

しるべする人だに見えぬおく山のふみみぬ道にまどふころかな

を得る。この歌には詞書はないが、題は「恋」である。「ふみみぬみち」が共通するので、頼実詠は道命詠の影響の下に詠まれた可能性はあるけれども、道命詠が「返事」がない人に対して、「ふみみぬ」を絡めた表現は、以上見てきたように、通常に詠まれるものとみてよいだろう。とすれば、小式部内侍のあまりに著名な

おほえやまいくののみちのとほければふみもまだみずあまのはしだ  
て（『金葉集』雑・550他、但し『百人一首』等では「まだふみもみ  
ず」となる）

という歌は、恋歌からの転じであることが、実のところ、この歌の最大の見せ所（工夫・技法）ではなかったか。

ついで、道命詠の残りの二例（詞花215・231）を検討したい。「春になりてあはむとたのめたる女の、さもあるまじげにみえければいひつかはしける」という詞書をもつ215番歌

やまざくらつひにさくべきものならば人の心をつくさざらなむ  
および、「冬のころ、くれにあはむといひたるをんなに、くらしかねていひつかはしける」という詞書をもつ231番歌

ほどもなくくるとおもひし冬の日のころもとなきをりもあり  
けり<sup>9)</sup>

である。両首は、「春」と「冬」という違いはあるが、逢いたい女性に会えない（その女性を待てない）悲しみや辛さという実情を詠んだものであることでは共通する。それぞれに表現の特性を見ておきたい。

215番歌から入ろう。「やまざくら」と「人の心」の組合せは、『後拾遺集』・春上の藤原隆経詠（78）

山ざくらみにゆくみちをへだつればひとのころぞかすみなりける  
からしか現れない新しい表現である。その他では、『為忠家初度百首』  
「山路桜」題の藤原為盛詠（64）

枝ごとに人のころをとどめつつみちさまたげの山ざくらかな

『久安百首』（久安六年・一一五〇）の顕広（俊成）詠（春廿首のうち、  
809）

山ざくくら咲くより空にあくがるる人の心やみねのしら雲<sup>(10)</sup>

くらいしか存在しない。しかも、「人人、はな花見みにまかりけるをかくともつげざりければつかはしける」という詞書をもつ隆経詠には、置いてけぼりをくった恨みがまさるが「ひとのころぞかすみなり」と表現されているが、他の例は、山桜の美しさを詠んだものであり、恋の歌は、道命詠だけである。だが、215番歌も詞書を読まなければ、山桜の開花を待ちこがれる人々の気持ちを表しているとも読めるから、この点、他の例とも変わらないともいえる。むろん、215番歌の「山桜」はメタファーである。だが、メタファーであろうが、実景あるいは屏風歌であろうが、和歌で風景を詠むとなると、そこに同時代で用いられた語句の組合せを用いようと、とにかく山桜賛美に向かってしまうのである。その際、本来の狙い（＝恋歌）とは無関係な山桜を見たい願望表現となる。215番歌の場合は、「世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」『古今集』・春(53) 在原業平)のごとく、桜の開花をめぐる悩ましい気分が詠まれることになるのである。

続く231番歌については、新大系本は「同想歌」として『千載集』・恋三、「題しらず」藤原忠通詠(796)

冬の日を春よりながくなす物はこひつつくらす心なりけり

を挙げている。これは、短い冬の日を長くさせるものは逢えない相手等待つ恋心だ、という歌意であるから、冬の日の短さが実はそうでもなかったという点では同想歌と言えるだろう。だが、たとえば、『続後撰集』・夏(215)・「題しらず」の藤原顕季詠

くるるかと見るほどもなくあけにけりをしみもあへぬ夏の夜の月

を見ると、夏の夜の短さを「くるる」「ほどもなく」という道命詠と同語彙で表現していることが了解されるし、さらに、顕季詠の本歌ともいべき『小町集』(53)には

夏のよのわびしきことは夢にだにみるほどもなくあくるなりけり<sup>(11)</sup>

と表現されているのを見ると、どうやら231番歌は、夏の夜に用いられる「ほどもなく」を冬の日に転じたことに和歌としての新しさがあるのではないかと思われる。そして、この延長線上には、

ほどもなくくるる日影に音をぞなくひつじのあゆみきくにつけても

と詠んだ藤原定家がいる(『拾遺愚草』「猷十」(769))。定家詠になると、もはや夏・冬という季節などは取っ払われている。そこにあるのは、「くるる」が「羊の歩み」と縁語的に連結されて死のイメージで覆われているように、すぐにでもやってきそうな死の気配である。定家詠は215番歌を見て、独自にいじったのだろう。夏から冬(実は、恋)、それから死へと変じていったのだ。

さて、ここで道命詠を離れて、「あひそめてまたもあひはべらざりけるをむなにつかはしける」という詞書をもつ観覚詠(後拾遺718)に移りたい。

あきかぜになびきながらもくずのはのうらめしくのみなどかみゆらん

これは題詠では「逢不逢恋」に属するものだろうが、この歌は「秋風」

「葛の葉」「うらめしく」の語句連合が表現技法の核だろう。これら三要素が揃った起源的歌は、これも『新大系』脚注が指摘するように、『古今集』恋五の平貞文詠(823)

秋風の吹きうらがへすくずのはのうらみても猶うらめしきかな

であろう。「うら」を都合三回も用いて、畳みかけるように「うらめしさ」を強調する詠みぶりは、後代に甚大な影響を与え、『新古今集』(恋四)に取られた村上天皇詠(1243)

くずの葉にあらぬわが身も秋風のふくにつけつつうらみつるかな

や『金葉集』恋上の藤原正家詠(392)

あきかぜにふきかへされてくずの葉のいかにうらみし物とかはしる

と結実したが、観覚詠も貞文詠の影響歌の一つと見てよいだろう。但し、観覚詠には「秋風」+「ふき」という通常の組合せではなく、「秋風」+「なびき」という組合せを用いていることは一応注目に値するが、この「秋風」+「なび(か・き・く)」+「くず」の組合せも、『万葉集』(新番号210)や『家持集』(113)の

まくずはらなびくあきかぜふくからにあだのおほのはぎのはなち  
る(『家持集』)

が既にある。おそらく、観覚は、『古今集』貞文詠と家持詠を組み合わせ、「逢不逢恋」の心境を「なびきながらも」「うらめしくのみ」と表現したのである。言うまでもなく、和歌の伝統に沿った物言いであり、僧侶らしきなどはそこにはない。

以上、道命・観覚の異性間の実情歌の表現を分析してきた。どの歌も他の恋歌と変わらない。要するに、勅撰集に選ばれるくらいの秀歌であり、さらに言えば、僧侶らしい歌などは存在しない、ということでもある。だが、こんなことはとくに予想されていたが、もっとも大事なことが実はあった。

道命の勅撰集入集数は、その後、『千載集』(九首)・『新古今集』(四首)・『続後撰集』(二首)・『続古今集』(三首)・『玉葉集』(三首)・『続千載集』(一首)・『続後拾遺集』(二首)・『風雅集』(二首)・『新千載集』(二首)・『新拾遺集』(二首)・『新後拾遺集』(一首)・『新続古今集』(二首)となる(観覚詠は『後拾遺集』四首(夏一・秋上一・恋二)のみ、源縁詠は『後拾遺集』三首(春二、秋一)、『金葉集』二首(秋一首と当該歌)が、そこには一つとして、異性間の実情歌および題詠を含む恋歌は一首として入集していない。これは一体どういうことなのか。

さらに、それは、道命だけではなかった。『千載集』以降『新続古今集』に至るまで、僧侶が詠む恋歌から異性間の実情歌は入集しなくなるのである。「題不知」も含めて、「題」を見る限り、題詠一色になったのだ。<sup>(12)</sup>おそらく、これは、次節で展開する、同性間実情歌が消えていった事情と同じ理由によるものではないだろうか。即ち、僧侶の異性間実

情歌も『新古今集』以降の勅撰集では勅撰集入集歌としてふさわしくないと判断され、それが定着したということである。

その意味で、『後拾遺集』・『詞花集』に入集した道命の実情歌は、以下論ずる同性間実情歌と並んで、ある種の突然変異、別の言い方をすれば、院政期における、通常、中世和歌の始発とされる、和歌革新運動の一環あるいは徒花と読み解くことができるように思われる。ある意味で、白河院政期から鳥羽院政期に至る初期院政時代は何でもありのいい時代だったと言えるのかもしれない。

#### 四、同性間実情歌の表現分析

そこで、(B) 同性間の実情歌に移る。前稿でも指摘したように、男色(稚児への愛)を主題とした恋歌は、勅撰集の歴史では、『拾遺集』に続いて、『後拾遺集』・『金葉集』・『詞花集』・『千載集』の計八首(但し、行尊詠は稚児に代わっての詠歌)しか入集していない<sup>(13)</sup>。そこから、ほとんどは成就しないものばかりとはいえ(成就しないからこそ恋の主眼は逆説的に成立するのだが)、恋とは、異性間のものという認識がまずあって、それが『拾遺集』・『千載集』の過程で一瞬揺らいだけれど、結局はまた元の正しい姿に戻るといふ経路が見えてくる。

「正しい姿」に復帰した動因を作り出したものとしては、第一に、「題詠」の定着が指摘できるだろう。題詠に伴い僧侶なる属性の無化がまずまず徹底していったのではあるまいか。つまり、僧侶の実情と結びついた男色が題詠によって結果的に排除されたということだ。

題詠は、詠み手の属性を超えて詠み手に自由を与えると、前稿にも記したが、この自由は、他方で、恋とはこのようなものだった『堀河

百首』などに典型的なタイポロジカルに分類された題によって拘束された、言語矛盾的な言い方を敢えてすれば、不自由な自由である。加えて、使われる歌ことばも題によって概ね決まってくる。題を詠むに際して、大胆に自由さ、たとえば、題の字を詠まないなどを実行し得たのは、俊頼や定家といったごく一部の達人に過ぎない。大半の歌人は、題を前にして題にふさわしい類型的な語句と先行歌(本歌も含む)を見出し、それらを見て、辛吟、言い換えれば、瀬踏みしながら、言葉を選び、周囲から浮かない和歌を詠んでいたのである。よって、こう言っておきたい。題詠によって、予め定められた範疇(題・表現等)に拘束された詠み手の自由さが定着したのである。むろん、醍醐寺で編まれた私撰集『統門葉集』(嘉元三年・一三〇五)には男色の実情歌があるように、男色歌はその後も詠まれ続けていただろう。簡単に言えば、詠まれてはいたが、勅撰集には採用されなくなっただけである。

男色歌が勅撰集から排除されたもう一つの動因は、勅撰集の編纂において、僧侶が禁じられている恋は、女色であれ、男色であれ、実情であるかぎり載せないという忌避意識が確立したからであろう。具体的には、これまで見たように、それは、後鳥羽院によって『古今集』の新たな復古が目指された『新古今集』の時点で確立したと見てよいのではないかと(僧侶の異性間実情歌は『千載集』はなくなっているが)。

そこで、『後拾遺集』・『詞花集』までの男色歌六首の検討を行いたい。六首(律師慶意 後拾遺73、僧都遍救 後拾遺74、永縁 金葉43、最巖 詞花23、仁祐 詞花259、行尊 詞花260)はいずれも逢いたい「わらは(＝稚児)」に逢いたくて逢えないという状況が詠まれている実情歌である。そして、六人の僧侶の共通性を記しておくと、全員が僧綱、即ち、顕密僧(＝高僧)ということである。つまり、土谷恵の詳細な分

析があるように、上(下)級貴族・官人層の子孫である稚児と呼ばれる童には高僧の性愛の対象となるものがいた。六首もこうした対象を前提としたものである。

それでは、それぞれの表現を分析していきたい。はじめは慶意詠である。

たのめけるわらはのひさしうみえはべらげりければよみはべりける

たのめしをまつにひごろのすぎぬればたまのをよわみたえぬべきかな

この歌は「たのめしをまつ」↓「すぎ」と「たまのをよわみ」↓「たえぬ」の組合せによって出来上がっている。それぞれの語構成について、前者では、「たのめし」・「まつ」・「すぎ」と全部揃うのは本歌しかないが、「たのめしをまつ」では、『新古今集』・羈旅(909)に採られた菅原輔昭の

まだしらぬ古郷人はけふまでにこむとたのめし我を待つらむ

『伊勢集』(154)には

まつかけてたのめし人もなければなみのこゆるはなほぞかなしき

『赤染衛門集』(54)には

偽にきのふたのめしけふの目を暮れなばあすをまたや待つべき

『下野集』(164)には

ちとせとやたのめし人のちぎりけむまつはげにこそひさしかりけれとあるように、撰関期の恋歌において、「たのめし」↓「まつ」は決まった組合せとなっており、恋の行方も他の恋歌同様に、芳しくないことは慶意詠と同じであった。

そこで、「たまのをよわみ」を見たい。この表現は夙に『万葉集』にあり、(二)例、「かたいともちぬきたるたまのをよわみ」みだれやしなむ ひとのしるべく(2801)、「たまのをを」かたをによりてをよわみ みだるとときにこひずあらめやも(3095)、2801番歌は『古今和歌六帖』(3188)に源融詠として採られていた。この影響の下に生まれたのが、独り寝の苦しみを詠んだ『好忠集』(303)の

みだれつつたえなばかなし冬のをわがひとりぬるたまのをよわみ

と、「露」という題で詠まれた『清輔集』(121)の

たつたひめかざしの玉のををよわみみだれにけりとみゆる白露

である。<sup>(15)</sup> いずれも「たまのをよわみ」と「みだれ」の組合せを持っている。そこへ、慶意詠を絡めると、「たまのをよわみ」を用いながらも、「みだれ」は用いてない。その代わりに選ばれたのが「たえぬ」である。「たえ」は既に好忠詠にもあり、これが大きく響いていると考えられる

が、直接的には、『後撰集』恋二(646)の貫之詠

年ひさしくかよはし侍りける人につかはしける 　　つらゆき

たまのをのたえてみじかきいのちもて年月ながきこひもするかな

が両者を繋ぐ役割を果たしたであろう。こうして「たまのを」が「たえ(絶え)」が「みだれ」を伴わずに連結されるという語構成が得られたと言ふことになるだろう。

してみると、慶意はこれまで存在した二系列の歌ことば(語構成)を組み合わせて、かの歌を詠んだということである。その前提には、貫之詠の「詞書」と共通する状況がおのが身にもあり、その状況にふさわしい和歌は何かという連想を伴う思考が働き、上記の組合せに結実したのだろう。よって、この歌が『後拾遺集』に入集したのは、和歌として問題がなく、秀歌だったことが当たり前ながら諒解される。題材の特異性は、『後拾遺集』にあつては、繰り返しになるが、考慮されなかったということでもある。

続いて、遍救詠と永縁詠に移ろう。遍救詠は

おもひけるわらはの三井寺にまかりてひさしくおともしはべら  
ざりければよみ侍ける

あふさかのせきのしみづやにごるらんいりにしひとのかげのみえぬは

とあるように、愛していた稚児が三井寺に出かけて何の連絡もしないことを心配して詠んだ歌である。遍救は、『僧歴綜覧』に長保三年(一一〇〇)に「明豪僧正の奏に依り惣持寺最初阿闍梨」となっているから、

天台でも山門(延暦寺)の僧である。稚児が三井寺に行くということから、常に対立していると見なされている山門と寺門の相互交流が窺える話でもあるが、それはともかく、遍救詠のキーワードは「あふさかのせきのしみづ」であり、この句となれば、当然のごとく『拾遺集』・秋(『古今和歌六帖』にも)の貫之詠(170)

延喜御時月次御屏風に

あふさかの関のし水に影見えて今やひくらんもち月のこま

が想起され、「かげのみえぬ」も「影見えて」を引いていることから、貫之詠を遍救詠の本歌と見てよいだろう。加えて、「いりにし人」についても、『古今集』・冬の壬生忠岑詠(327)

みよしのの山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

が響いているだろう。「おとづれもせぬ」を貫之詠によって「かげの見えぬ」に変換させているのである。

そして、永縁詠につく。「多聞といへるわらはをよびにつかはしけるに見えざりければ、月のあかりけるよ、よめる」とある詞書から、やはり、慶意・遍救と同様に、逢いたいのに逢えない稚児への籠めた恋歌である

まつ人のおほぞらわたる月ならばぬるたもにかげは見てまし<sup>(17)</sup>

新大系本(『金葉和歌集 詞花和歌集』川村晃生・柏木由夫校注)は、

『古今和歌六帖』(306)の源重之詠(『重之集』265にも再収)

まつ人の影は見えずて秋のよの月の光ぞ袖にいりける

を参考歌としてあげるが、「月の光ぞ袖にい」る状態は、涙で袖に月の光が写っているということであり、それは永縁詠でいう、「月ならばぬるたもにかげは見」るだろうに、と同じことである。永縁が「月のあかりけるよ」と詞書を記しているように、重之詠を参考にしたことはまず間違いない。

とすれば、「おほぞらわたる」なる表現はどうなのだろうか。この表現をもつ最も著名な歌は、『大和物語』四八段、『寛平御集』(9)、『新古今集』恋一(1019)に採られた宇多天皇の

おほぞらをわたる春日のかけなれやよそにのみしてのどけかるらむ  
(『寛平御集』ただし、異文はない)

だろう。但し、宇多詠では、「おほぞらをわた」っているのは「春日」であり、月ではない。これを永縁は、重之詠を押さえつつ「月」に変換したのでだろう。これに似た趣向を持つ歌としては、『伏見院集』(1687)の

恋

おほぞらをわたるや月のよそにしてはるけき人とみでやすぐべき

がある。伏見院が「月」と変えたのに、永縁詠が絡んでいる可能性はある。

最後に、『詞花集』入集の三首を見ておこう。いずれも、これまでと同じく、稚児が訪ねてこないことを嘆くものであるが、違いもある。訪ねてこないのではなく、別の僧に行ってしまったことを嘆いた仁祐詠には、別の僧である行尊が稚児の代詠をするという形で贈答歌になっていることだ。とまれ、男色歌の基本は訪ねてこないこと(気移りも含む)を嘆くというパターンであるようだ。  
最厳詠から見る。

みかりののしばしのこひはさもあらばあれそりはてぬるかやかたを  
のたか<sup>18)</sup>

新大系本が指摘するように、この歌は、「みかりの(御狩野)・「しば」・「そりはて」・「やかたをのたか(矢形尾の鷹)」が縁語をなし、鷹狩のイメージが前面に出されている。『為忠家後度百首』(保延元年・一三五年頃)には「寄鷹恋」なる題が掲げられているが、ここに「やかたをのたか」が二首用いられている。

藤原親隆 (648)

とやかへるしらふのたかのやかたをのやがてこひにもかかりぬるかな

源頼政 (654)

しばしかとおもひしほどにやかたをのたかとそりぬるひとぞこひしき

がそれである。とりわけ頼政詠は「しばし」「そり」もあるので、最厳詠と近似している。もっとも、「やかたをのたか」という『万葉集』以

来の言葉を復活させたのは、『堀河百首』（長治二・三年・一一〇五、六頃）である。「鷹狩」と題されて、以下の三首が詠まれている。

藤原仲実 (1063)

やかた尾のましろの鷹を引きすゑてうだのとだちを狩りくらしつる

源顕仲 (1066)

やかたをのしらふのたかを引きすゑてとだちの原を狩りくらしつる

藤原基俊 (1067)

やかた尾の鷹手にすゑて朝たてばかたのの原にきぎすなくなり

『堀河百首』の「鷹狩」は交野・冬・鷹狩のイメージ作りでも貢献したが、まだ鷹と恋を結びつけてはいない。むろん、「鷹狩」題から恋の歌は詠めないからだが、だとすれば、『為忠家後度百首』の「寄鷹恋」題が生まれることによって、最厳詠が生まれたということになるだろう。

最厳詠は同性間の実情歌であるが、まさに『為忠家後度百首』と同時代に生きた彼（『僧歴綜覧』によれば、保延元（一一三五）年に法橋になっている）にとっては、この手の表現が実情歌を詠む際には、身近にあったということだろう。その意味では、極めて現代風の歌なのである。

最後に、別の僧に走った稚児の代わりに、その僧が返歌をするという意味で奇妙な贈答歌になっている、仁祐詠と行尊詠を見ておきたい。<sup>19)</sup>「いとほしく侍りつるわらはの、大僧正行尊がもとへまかりにければいひつかはしける」という詞書をもつ仁祐詠

うぐひすはこづたふはなのえだにてもたにのふるすをおもひわするな  
に対して、「わらはにかはりて」行尊は

うぐひすは花のみやこもたびなればたにのふるすをわすれやはする  
と返した。この問答で最初に想起されるのは、なんのことはない、『源氏物語』「初音」巻と明石の君と姫君（後の明石の中宮）との間で行われた歌の贈答（三首、引用は『新編国歌大観』）ではなからうか。

明石の君 (354)

年月をまつにひかれて経る人にけふうぐひすの初音きかせよ

明石中宮 (355)

ひきわかれ年は経れども鶯の巢だちし松の根をわすれめや

明石の君 (356)

めぐらしや花のねぐらに木づたひて谷のふる巢をとへるうぐひす

母である明石の君が娘（後の明石中宮）に会いたい気持ちを切実に詠む（354）ことに答えて、娘も答え（355）、さらに母が再度返歌をする（物語では、訪ねた光源氏が文を見るという設定になっている）のだが、「わすれ」「こづたひ」「谷にふる巢」が共通することに加えて、「うぐひす」・「谷の古巢」をもつ最古例は管見の及ぶところ、おそらく『源氏物語』の明石の君詠であり、それに続くのが、仁祐・行尊詠であることを

考慮すれば、仁祐詠（および行尊詠との贈答）が『源氏物語』を本歌とした蓋然性は高い。思うに、仁祐は、自分のもとから離れて、行尊に走った稚児の思いを詠むの際に際して、自らを明石の君および明石の君（「こづたふ」「谷の古巢」「わすれ」）に準えたのだろう。

興味深いことは、仁祐を捨てて行尊のもとに走った稚児に代わって行尊が詠んだ歌は、「わすれやはする」というものであり、「忘れめや」の明石の中宮と同様の、忘れないとする歌意であることだ。むろん、むげな断り方をしない和歌の伝統に沿ったものであり、仁祐に対する行尊の配慮であろうが、それを実行したのが、稚児ではなく、他ならぬ、稚児をある意味で奪った行尊なのである。この返歌を受けとった仁祐がどのように思ったのであろうか。ひょっとしたら、物語の連想で、女に代わって男が言い寄る敏行をさらにその気にさせる歌を詠んだ『伊勢物語』百七段の読後感のようなものを抱いたのか。

それはともかく、『源氏物語』の引き裂かれた母娘関係を引き裂かれた僧・稚児関係に転移させるなど、男色歌において特異の語句や表現などは窺えず、利用できる物があれば、なんでも用いて、詠者名を隠してしまうと、まったく通常の恋歌と変わらないのである。逆に言えば、和歌とは、詠者という個人名が深く刻印されながら、表現は一定のイメージの中に回収されて、個人名を消し去ってしまう、そのような力をもっていることをここで改めて確認しておきたい。

以上、同性間の恋を詠んだ六首を検討してきた。いずれも一般的な恋歌と変わらない、まったく同様な表現を持つ恋歌であることが諒解されただろう。だから、再度の繰り返しになるが、男色歌が勅撰集から排除されたのは、和歌の表現が理由ではありえない。僧侶による男色歌それ自体が排除されたということ以外の理由はないだろう。

## 五、題詠歌の表現分析

中世和歌の本領は（C）題詠であった。僧侶の恋歌もそれは変わらな  
いが、ここでは、宣源詠は既に前稿で記しているのので、実源（金葉  
403）・良暹（金葉421）詠の二首の分析を行う。

両詠が題詠であることは「恋の心を人人のよみけるによめる」（実源詠）、「はじめたる恋の心をよめる」（良暹詠）という詞書から明らかであろう。「恋の心」であれ「はじめたる恋（初恋）」であれ、詠者がその状態にあるかとは無関係に役割としてその状態を演じて（＝詠んで）みせているからである。

実源詠から入る。

いのちをしかけて契りしなかなればたゆるはしぬる心ちこそすれ

新大系本が「命がけの恋を、そのままに直叙した趣き。無技巧で率直な真実味がある」とするように、「たゆるはしぬる心ち」などの表現がそれに当たるのだろう（これは実源詠以外に用例を見ない）。しかし、これはあくまで題詠であり、「恋の心」を実源はこのようなものだと直叙したのである。と共に、先行する歌人の例をみておくと、『赤染衛門集』(464)には「かたらひし人の、ひさしくおとせざりしに」という詞書をもつ

心にもあらずうき身のいのちかなたえなばたゆるほどをみましや

がある。つらい身の命だから、いっそのこと絶えるなら絶えるほどを見てみたいものなのに、と訪ねて来ない男を恨む歌意であるが、恋が成就しない場合、もしくは相手が不実な場合は、命が絶えるという詠み方があったことだろう。これに対して、実源の場合は、絶えるのは、「契りしなか」であり、「なか」が絶えるのは死ぬ心地がするということとろに工夫があるのである。

「なか」が絶えるとする歌では、『千載集』に採られた大式三位詠(910)がある。これも「かたらひける人のひさしくおとづれざりければ、つかはしける」とあるように、詠まれる場は赤染衛門詠と同じ設定である。

うたがひし命ばかりはありながらちぎりし中のたえぬべきかな

こちらの方が、さらに実源詠に近い。だが、疑っている「命」だけはまだ残っている点が大きな違いである。とすれば、実源詠において「直叙」「無技巧」とされるのは、「たゆるはしぬる」というここにしかない表現を用いた箇所くらいということになる。それ以外は、「いのち」「なか」「たえ(たゆる)」といった語彙を用いて、赤染衛門詠・大式三位詠の詠まれる場を「恋の心」の場として再現することではないだろう。赤染衛門・大式三位詠は実情歌と思われるものの、別段、実情と題詠も、同性間・異性間と同様に、表現は全く変わらないのだから、両首がある種の規範を与える役割になっていたと思われる。実源にしてみれば、それらを踏まえて、あたかも自分が恋の渦中にあるような「直叙」を具現したということだろう。

それでは、明確な題詠である「初恋」を詠んだ良暹詠はどうだろうか。

かすめてはおもふころをしるやとてはるのそらにもまかせつるかな

この歌のキーワードは「かすめては」になるだろう。これについて、新大系本は、『能宣集』(282)「すくもびのけぶりもいとどたつはるをもゆるなげきとかすめてしかな」を、和歌文学大系『金葉和歌集 詞花和歌集』(錦仁校注)は、『元良親王集』(128)「つげそめしおもひをそらにかすめてもおぼつかなさのなほまさるかな」を参考歌として挙げている。素材としては、「つげそめし」「そら」とあるから、元良親王詠の方が適例だろうが、「かすめて」という霞の動詞化と下句の「はるのそらにもまかせつるかな」という組合せは、「はるのそら」に「霞」がたなびいていることから、「まかせる」は、両大系の主張するように「かすかに恋を打ち明けた」の意味となる。とまれ、「かすめて」が「はるのそらえにまかせ」で言い換えられているから、そこがややしつこく、かつ、意味を読み取るのに曖昧さをも増幅してもいるが、一応、高度な技巧を駆使した歌といえるだろう。

だが、ここで用いられている霞と恋の結び付きが他にはあるのだろうか。勅撰集の初例は、『後拾遺集』恋一の冒頭の後朱雀院詠(604)がそれに相当するだろう。

ほのかにもしらせてしかなはるがすみかすみのうちにおもふ心を

「ほのかにもしらせてしかな」に歌意は尽くされているが、「ほのかに」のニュアンスを伝えるのが「はるがすみかすみのうちに」である。つまり、春霞と結びついた「ほのかに」恋心(＝初恋)を伝える初例はこれ

というわけだ。おそらく俊頼は、春・霞と初恋という和歌の表現に加えて、後朱雀院詠を受けて、良暹詠を恋下の冒頭に置いたのであろう。

最後に、良暹詠の技巧の高さを保証している「そらにまかせ」という表現を検討しておきたい。むろん、この表現も良暹のオリジナルではない。『新古今集』秋上(325)に入集した齋宮女御(徽子女王)詠

わくらばに天の河なみよるながらあくるそらにはまかせずもがな

を先行歌としてまず挙げることができようか。齋宮女御詠では、七夕の夜が終わらないように明けゆく「そらにはまかせ」ないようにしたいとなっているが、七夕詠で夜の永続を願うのは、やや後代になるけれども、『続後撰集』雑(1059)に入集した平(北条)泰時詠(七夕の朝)

あけぬともあまのかは霧たちこめてなほ夜をのこせほしあひのそら

がある。夜の短さを嘆く例は、『千載集』秋上(239)の源俊頼詠「七夕のあまのかはらのいはまくらかはしもはてずあけぬこの夜は」他、枚挙に遑はない。そのなかで、良暹は、齋宮女御詠の季節を春に、夜が明け「あくるそら」を霞にちなんだ「春の空」に変換して、恋の歌としたのだろう。

## おわりに

やや表現分析に傾きすぎたきらいはあったけれども、『後拾遺集』から『詞花集』まで、「僧侶の恋歌」を異性間実情・同性間実情・題詠の

三パターンに分類して分析してきた。結論は、いずれのパターンも同様であった。即ち、僧侶独自の表現なるものは存在しないと言う事実である。考えてみれば、それはごく当たり前のことだろう。表現分析を通して見えてくるのは、僧侶が和歌を詠み、あまつさえ、恋歌まで詠み出したということは、和歌が作りあげる、私の言葉を用いれば「古典的公共圏」に参画したということである。それは、和歌にふさわしい表現を用いて、和歌を知る相手(個人・歌会、歌合等)に向かって詠むということと意味する。そうでなければ、和歌を詠んだことにもならないし、「古典的公共圏」に参画したことにもならないからである。したがって、和歌という韻文形式を選択した時点(当時に他の手段は漢詩以外なかったろうが)で、僧侶は和歌的世界に取り込まれてしまうしかないのである。逆に取り込まれない限り、いい歌も詠めないのだ。

だから、僧侶が異性間・同性間・題詠という異なった場において、実情か役割かといった動機やポジションの違いを前提にして恋歌を詠んでも、皆同じということになったのである。これがまさしく和歌の力であった。実情か、題詠か、同性間か異性間か、これらの差異や、詠者の属性を一切超えてしまう言語宇宙、言語空間こそ和歌の和歌たる所以ではなかったか。

だが、こと、勅撰集に限って言えば、僧侶の詠む異性間の実情歌は『拾遺集』から『詞花集』までに、同性間の実情歌は『拾遺集』から『千載集』までに限定され、それ以降、僧侶の恋歌は、すべて題詠に限られることとなった。しかし、「古典的公共圏」という大きな枠組みから見れば、題詠こそ「古典的公共圏」そのものなのである。個人名をもった歌人が題に即して和歌を詠む。場合によっては共同で詠む。そこには、院・天皇・貴族・女房に加えて、僧侶も入ってくる。鎌倉以降(嚴

密には室町以降には) 武家も参画してくる。こうして場が和歌によって構成される場合、和歌の高度のゲーム化しか場を立ち上げる術はない。とすれば、題詠なるものによって、属性を越えた世界がここに具現するということになるのである。

『新古今集』以降の題詠しかない僧侶の恋歌の変容と同一性、これらのありようが次号の課題となるだろう。

### 注

(1) 勝又基によれば、近世前期において大いに作られた「仮名教訓書」は著者名を記さないことを前提としていたという(『近世前期における仮名教訓書の執筆・出版と女性』、『民衆史研究』79、二〇一〇年五月)。その他、草子・川柳・狂歌の戯名といふべき作者名は顕示とともに隠蔽も目的の一つだったろう。

(2) 勅撰集の「詠み人知らず」歌については、三代集の頃は概ね伝承歌であるが、後代になると、名前を明かしたくない、もしくは明かせない歌か、『万葉集』所収歌にはほぼ限定される。よって、これは数量的には詞書のよみ人しらずや左注を無視しておおざっぱに数えると、二六六例であり、二十一代集全体(三三七〇八首)の7.9%程の比率でしかない。ちなみに、勅撰集における歌数を示すと、以下のようになる(『勅撰集 付新葉集 作者索引』、名古屋和歌文学研究会編、和泉書院、一九八六年による)。

古今集 452/1100 (41%)、左注 (15%)、後撰集 718/1435 (50%)、拾遺集 436/1351 (32%)、後拾遺集 58/1218 (4.7%左注 (1))、金葉集 (二度本) 58/717 (8.0%)、詞花集 23/415 (5.5%)、千載集 23/1288 (1.8%)、新古今集 95/1978 (4.8%)、新勅撰集 101/1374 (7.4%)、新後撰集 57/1371 (4.2%)、統古今集 34/1915 (1.8%)、統拾遺集 25/1459 (1.7%)、新後撰集 51/1607 (3.2%)、玉葉集 76/2800 (2.7%左注 (3))、統千載集 62/2143 (2.9%)、統後拾遺集 71/1353 (5.2%)、風雅集 56/2211 (2.5%)、新千載集 94/2365 (4.0%)、新拾遺集 35/1920 (2.9%)、新後拾遺集 71/1554 (4.6%)、新統古今集 50/2144 (2.3%) (なお、歌数・総歌集には異本歌・後出歌は含んでいない)となる。傾向としては、三代集に集中していることである。とりわけ『後撰集』に至っては、約半数が「よみ人しらず」集である。それ以降、10%以内(17~8%)で推移するが、金葉・新古今・新勅撰・玉葉・統後拾遺・新千載・新後拾遺がやや多いと言えようか。こうした傾向がもつ意味についても、新たな分析が

必要だろう。

(3) 岡崎真紀子「『釈教』の詩学―『新撰菟玖波集』卷十八の配列をめぐって―」(『国語と国文学』84巻、10号、二〇〇八年十月)によれば、「言葉そのものの喚起力に拠って立つ連歌においては、『釈教』という部立への意識が、句中に含まれる言葉じたいの持つ意味合いという、すぐれて明示的な語彙のレベルで見定められるものへと問口を狭めていった」が、「和歌において仏教を受容する際には、仏教的な主題は歌題や詞書にゆだねて、歌では仏教に関わる内容を婉曲に表したり、和歌的文脈に引き寄せて詠んだりなど、言ってみれば柔軟に言葉が運用されることで、表現が幅広く展開した」という。連歌・連歌の撰集と和歌・和歌集の違いを見事に説明した文言である。本稿も大いに岡崎論文に負っている。

(4) 拙稿「僧侶の恋歌(1) 勅撰集編(上七)」(『明星大学研究紀要』日本文化学部・言語文化学科)18 二〇一〇年、参照。

(5) なお、永縁詠は、『金葉集』二度本しかなく、白河院が認めた三度本には入集していない。こうなったのは男色歌なのかは不明だが、やや興味をそそる問題ではある。永縁は堀河百首のメンバーでもあり、三度本にも七首入集している。

(6) 本歌を前稿では落としていた。お詫びすると共に、ここに訂正しておきたい。

(7) 道命の後拾遺66・772番歌については、前掲拙稿を参照されたい。

(8) 和歌および詞書の本文は特に断りがなく、すべて『新編国歌大観』に拠っている。

(9) 本歌は『後葉集』に収められている。

(10) 『長秋詠藻』(9)、『統千載集』春上(81)にも収められている。

(11) 『風雅集』夏(394)にも収められている。

(12) 僧侶以外の俗人の場合も、古歌(業平・兼盛・光孝天皇・宇多天皇・村上天皇・伊尹・師輔・兼通・兼家・実方・朝光・道信・定頼・相模・道綱母・本院侍従・和泉式部・馬内侍・小侍従・大式三位など)に実情歌が現れる傾向があるようである(むろん、同時代人の実情歌がないわけではないが、極めて少ないといっよう)。その中で、近い時代では、俊成の実情歌が注目される。これらの問題はいずれ稿を改めて考察したい。

(13) 『千載集』の男色歌は、「よかほのふもとなる山でらにこもりる侍りける時、いとよろしきわらはの侍りければ、よみてつかはしける」という詞書をもった仁昭法師詠(672)「世をいとふはしとおもひしかよひちにあやなく人を恋ひわたるかな」というものである。これまでの男色歌と明確に異なる特質をもつ。それは「世をいとふはしとおもひし」「あやなく」とあるように、仁昭は自らの恋は罪だと自覚している事実があるからである。言ってみれば、唯一の僧侶的表現(「世をいとふ」など)をもった、

正しい「僧侶の恋歌」がこの歌なのだ。僧侶にとって禁忌である恋をする罪意識の表明、これをもつ意味はそれなりに大きい。だが、この歌を最後に男色歌は勅撰集から姿を消す。この問題については、本歌の持つ意味合い、俊成『千載集』と『新古今集』、さらに定家と定家以降については、次号で改めて検討したい。

- (14) 「中世寺院の童と兒」(同『中世寺院の社会と芸能』、吉川弘文館、二〇〇一年)に所収。土田によれば、「兒の階層は仁和寺御室の例でいえば、上には清華家の子孫、中間には御室の房官の子、下には御室の侍の子や院の下北面の子がいた。その下限は六位あたりの子とみられる」とのことだ。但し、土田も引く『宇治拾遺物語』七八・二二、『古今著聞集』三三三における顕密僧と童の関係は、童の身分が低く、稚児と顕密僧の関係とは異なると思われる。

- (15) 清輔詠の「たつたひめ」の「たつ」に「絶つ」のイメージが投影していると読めば、この歌にも「たまのを」と「たつ(絶つ)」の語構成が縁語的にあるということになるか。

- (16) 室町物語『秋夜長物語』は延暦寺僧と三井寺の稚児の悲恋物語であるが、ここでは稚児が行方不明(実は天狗に掠られたのだが)になり、それが契機となって、山門・寺門の戦いになり、寺門が焼尽している。寺門は山門との戦いで計四度焼尽していることを踏まえた上での創作であるが、遍教詠では対立にまで至っていないようである。
- (17) 文永年間(一二六四〜七四)に九条基家によって撰ばれた秀歌撰である『新時代不同歌合』にも四十八番左として、他の二首ともに入集している。番えられているのは、後鳥羽院の息、仁和寺御室であった道助法親王(一一九五〜一二四九)である。

- (18) 本歌は『後葉集』(藤原為経撰、久寿二・一一五五年)にも収められている。

- (19) 両歌も『後葉集』に収められている。

- (20) 先後関係は微妙ながら、教長と俊成にそれぞれ一首ずつある。

『教長集』(54) うぐひすの歌としてよめる

よのまにやたにのふるすを出でつらんまだあかつきのうぐひすのころ

『長秋詠藻』(49)

いっしかとたかきにうつれ春日山谷のふるすを出づるうぐひす

なお、近いところでは、『堀河百首』の仲実詠(55)にもあるが、「冬すみしふるすは雪にうづもれて谷の鶯春と告ぐなり」とあって、「谷の」と「ふるす」が離れている。

- (21) 三首とも二度本・三度本ともに入集している。